

私立大学における農学教育の未来

夏秋 啓子

東京農業大学国際食料情報学部教授

農学系学部・大学院の未来について議論しようとするとき、農学教育の未来を考えると同時に、それぞれの大学の存在の意義やその未来をも考えていかざるを得ない。本稿では、私立大学における農学教育の未来を中心に、筆者の所属する私立大学の例をもあげつつ考えていくこととする。なお、本稿は個人的見解であり所属大学を代表した見解ではないことを付記しておく。

農学教育に集まる期待

農学教育が、食料問題の解決だけでなく、エネルギー問題、環境問題、さらには生命倫理から国際的な農業開発まで、多様な課題に答えうる人材を育てるという、重要な責務を担っていることは、言うまでもない。農学を学ぼうとする学生が、友人や家族から「なぜ、農業に興味があるの?」「農家でもないのに.....」という素朴ともいえる疑問を持たれた過去とは異なり、「農業は大事だと思う」あるいは「食の安全・安心に関心がある」といった共感的な反応を得られることは確かに多くなっている。そして、農、食、健康、環境、あるいはエネルギーといった身近な問題を対象に、それらを解決する学問そして教育分野として、農学や農学教育が理解されるようになってきている。その反映として、ここ数年において農業総合コースの新設（拓殖大学）、農場の新設（明治大学）、農学部の新設（龍谷大学）などの動きが見られる。東京農業大学でも、社会の要請を反映したバイオセラピー学科、食品香粧学科などの設置に続き、平成26年4月からは食品安全健康学科がスタートする。

学びのストーリーが求められている

受験生にとって大学や学部の選択は大問題である。学力（合格できるか）、学費（国公立か私立か）、場所（通学か親元を離れるか）、といったことは大きな要素ではあるが、実はそれだけではない。農学の魅力をわかりやすく示す物語、ビジネスの世界でも言われる「人々が求めるストーリー」の有無は重要である。農学を学ぶと決めたと

しても、どのような学校で、どのように学び、どのようにキャンパスライフを過ごし、そして、どのように就職する、どのような未来が開けるのか、このストーリーを描いて見せることが、受験生の心を最終的に捉えるために必要となる。さらに、入学後の学生たちに学びの意欲を持ち続けさせ、場合によっては大学院での学びを継続させ、最終的には社会に自信を持って旅立たせるためにも、ストーリーは欠かせない。農、食、健康、環境、あるいはエネルギー問題への関心の高まりとともに、私立大学においては、建学や教育の理念がそのようなストーリーの骨格となるものと考えられる。

私立大学と建学や教育の理念

東京農業大学の創設者は、徳川幕府から派遣されてオランダで先進的な科学技術や国際法を学び、明治政府においては農商務大臣・逓信大臣などを務めた榎本武揚である。国際的視野を持った彼は、国力の一翼を担う農業の重要性を強く認識して、本学を設立した。また、初代学長は、稲粃の塩水選別法などにより、日本農業の近代化に貢献した横井時敬である。横井は、建学の精神を「人物を畑に還す」、教育研究の理念を「実学主義」と定め、さらに、「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」、また、「農学栄えて、農業滅ぶ」などの名言を残している。創設者や初代学長については、入学案内などにより入学前から、また、入学後はオリエンテーションほかにより折々、その姿を学ぶ機会が与えられる。教職員についても同様である。さらに、講義、実習や様々なイベントにおいて、創設者の姿勢や初代学長の名言は繰り返され、あるいは、様々に想起されるものとなっている。おそらく、意識するか否かに関わらず卒業後も容易に忘れられることは無いと思われる。全国の私立大学においても、同様であろう。建学の精神、教育理念をはじめ、建学からの歴史、大学に関わる人々の姿勢や言葉、さらには、校地や校舎などキャンパスの風景、といったものが、それぞれの私立大学を特色づけるストーリーを作り出していることは間違いない。

東京農業大学は、その存在を農学系の総合大学であると位置づけ、農学の諸分野の教育と研究に取り組むことを全面に打ち出している。大学全体が農業あるいは農学を中心に動いているといっても過言ではない。一方、多くの私立大学は複数の非農学系学部を擁している。そのため、その中であって、農学系学部からは、なぜ、農学か？をより強く語りかける必要があるだろう。そうしてこそ、それぞれの私立大学農学系学部において、受験生、学生、卒業生、教職員の誰もが、この農業と農学に関わるストーリーの大切な登場人物として自らを位置づけることができるのである。また、同時に、自らの学んだ大学への愛着というアンカー（錨）を持つことになる。逆に、このよう

なストーリーを十分に示せない私立大学の農学系学部は、合格できるか、学費は安い
か、親元を離れる価値があるかといった、本質とは遠い、いわば、即物的な競争に巻
き込まれることになる。

教員にも求められるストーリー

農学教育が従来の「農業」そのものに関わる教育という狭い枠内にいた時代は終わ
っている。社会の「気持ち」は、食料を生産する農業からスタートして、食、健康、
環境、さらにはエネルギーにと広がっている。そして、農学や農学教育にはこれらの
問題解決に貢献することが期待されている。その中で、農学と農学教育に携わる大学
教員も、自らの研究を深めるだけでなく、農業の現場、消費者の動向など幅広く目を
向け、社会の期待にどう応えていくのかを示す必要がある。すなわち、農学教育に携
わる教員にも、農学の魅力、前述でいえば語るべきストーリーをもつことが今まで以
上に求められているといえよう。また、前述のように、私立大学ではそれぞれの大学
の持つ建学の精神や教育の理念が、研究や教育に反映されることが期待される。た
とえば、国際化はどの大学でも掲げるキーワードであるが、教職員が能動的に取り組
むためには、その必要性がいわば腑に落ちるためのストーリーが必要である。東京農業
大学では創設者榎本武揚が明治の時代に早くも示した国際的な活躍が、そのストー
リーを紡ぎ出しており、大学全体での国際化への理解や積極的な取り組みを支えている。

海外へも伝えたい私立大学農学系学部・大学院の役割

さて、アジアの国々と日本の関係は様々に深い。また、農業面でも共通点あるいは
ともに解決すべき問題を有している。しかし、アジアの国々では、かつての日本にお
ける農学教育に対する視線と似たものが感じられる。すなわちそれは、今、なぜ、農
業？ である。経済的な発展を目指すこれらの国々では、学生が、ビジネスあるいは
IT 関連産業志向であり、農学系学部は不人気だといわれる。しかし、これらの国々で
も、経済成長や社会の成熟にともなって、遠くない将来、農、食、さらには、健康、
環境、あるいはエネルギーにと社会の関心が集まるものと考えられる。その時、これ
らの国々に向けても、農学教育の役割や日本における展開を伝えることができよう。
アジアの国々では私立大学に対する理解や評価は率直なところ低い。しかし、建学の
精神や教育の理念を含めて、日本の農学教育において私立大学の果たしている役割を
伝える努力は今後も一層必要であると考えます。また、後述するように農学を学んで卒
業した学生の多くが私立大学の出身であり、それぞれが日本の社会で活躍している実

情を発信していきたいものである。また、このような発信は、アジアからの留学生をより多く受け入れ、国際化を推進する一助となろう。

学生数の多さを活かす

私立大学の特性の一つに、教員一人当たり学生数の多いことがあげられる。数字の上では 20 人以上の学生を指導することになり、また、大教室型の講義では 200 人を超える受講者に講義をすることも珍しくない。学生数が多いことのマイナス面を語ることは容易である。しかし、学生数が多いことの強みも忘れてはいけない。

核家族化、少子化の中、学生たちは同質性の高い集団の中で成長してきている。しかし、大学では、様々なタイプの同級生とともに学ぶことになる。出身地、興味の対象だけでなく、実のところ学力も様々である。割合としては決して多くは無いが、農家出身あるいは農業高校出身の学生たちの存在もある。研究室では、年齢の違う先輩学生や院生、場合によっては留学生と実験もする。学生数が多いことが多様性をもたらし、学生の人間的な成長を助けている。

大学院生もまた、自らの研究に取り組むだけでなく、研究室の後輩指導あるいはティーチングアシスタントとしての業務を通して、人間的な成長を遂げていく。東京農業大学を例にすれば 200 を超える研究室がそれぞれの教育・研究活動の基盤となっているが、「研究室力」と呼ばれる研究室で学生・院生を育てる力が重視されている。これもまた、多数の学生・院生が切磋琢磨できる環境だからこそ可能なことであるといえよう。

多様な学生、さらには卒業生の存在は、教員にとっても重要である。例えば東京農業大学では、全卒業生 14 万人余を同窓会（校友会）で組織しているが、農業あるいは農業関連分野で活躍する卒業生からは多くの情報や研究のシーズを得ることができる。建学の精神「人物を畑に還す」を反映して各地、各国で活躍する卒業生のネットワークを活用した地域連携も数多い。また、各地で、農業あるいは農業関連分野の生産、加工、販売、さらには、教育、行政などの分野に広がるネットワークは、学生の就職にも活用されている。このように、多数の多彩な在校生と卒業生の存在は、私立大学においては特に強調されるべき資産である。日本の社会を、多様な私立大学の多彩な卒業生が支えている現状を見れば、私立大学の存在とその教育の重要性が理解されよう。

農学教育における教育の質

農学系学部の卒業生の多くが私立大学出身であるとはいえ、数だけの話ではないことはいうまでもない。昨今、大学における教育の質保証に関心が集まっている。「大学教育の分野別質保証の在り方について（日本学術会議 平成 22 年 7 月）」において、「分野別の質保証の核となる課題は、学士課程において、一体学生は何を身に付けることが期待されるのかという問いに対して、専門分野の教育という側面から一定の答えを与えることにある」と要約されている。そして注意すべき点の一つとして、「学生の立場から、将来職業人として、あるいは市民として生きていくための基礎・基本となる、真に意義あるものをしっかり身に付けられることが意図されていること」とされる。

これを踏まえて農学教育を考えれば、農学を通して農業および農業関連産業に関わる多様で有能な職業人を育てることがその任務の第一である。そしてそこでは、一定の教育の質の保証が必要となろう。農学の分野は幅広いので、すべてに共通する教育の到達基準を設定することは現実的とはいえない。しかし、同一の科目については、どこの大学で、誰に教授されても共通して学ぶべき到達基準を設定することは可能であり、少なくとも学部教育のレベルでは必要になると考える。私立大学においても、大学間で共通の教材や教科書の開発などを考え、関連学会との協力を得ることは、その助けとなる。将来的には国内外における単位の互換のためにも必要となろう。それらの基礎の上に、それぞれの大学あるいは教員の特色ある教育が行われていくことが期待される。

一方、「市民として生きていくための基礎・基本となる、真に意義あるもの」については、農学は農学を学ぶ者だけでなく大学教育を受ける誰にも、あるいは市民の誰にとっても基礎・基本とすべき学問分野であると考え。アメリカのマサチューセッツ工科大学において、全学生に一般教養科目として同一の教科書で生物学が教授されてきたように、農、食、健康、環境、エネルギーを網羅する科目（あるいは科目群）が学部を問わず教授されることは、これからの日本にとり有用であろう。農学系学部だけでなく、大学を卒業する誰もが農学に関わる基礎的な知識をもつことにより、農、食、健康、環境、エネルギー問題を科学的に考えることのできる市民が育つものと考え。その中から、新たに農学を学ぼうとする社会人が多く出現することも期待したい。農学教育、とくに大学院教育においては、社会人学生の入学が、研究をより現場に近づけるものと考え。

教育か研究か

大学教員の役割は教育か、それとも研究か、というかつての問いはもはや問いとして通用しない。大学の教員は教育も、研究も、社会貢献も求められており、さらに、社会人としても家庭人としても、あるいは職業においても私生活においてもバランスの取れた存在であることが求められている。

それでは、私立大学の役割は教育か、それとも研究か、という問いについてはどうであろうか。私立大学では学力的にも幅のある多くの学生の教育に多くの時間をかけ、卒業生を輩出しつつ、同時に、学問的にも高い研究成果を多く上げている実績がある。科学研究費あるいは各種の外部資金の獲得、産業界との連携なども積極的に行っている例が多い。困難の多い環境の中、私立大学の教員が使命感をもって教育と研究とに取り組んできた実績は決して無視できないものである。それだけではない。何より、農学系学部・大学院においては、農業およびその関連産業が急速に変貌する中、農業の現場あるいは社会との結びつき無しに適切な教育は行えない。すなわち、農業およびその関連産業からの問いに教員自らが研究を通して応えることによって、農学教育が社会の求める職業人を生み出すことを可能にする。「教育に専念する大学」というスタイルは、少なくとも農業およびその関連産業という現場をもつ農学教育にはなじまないものであって、それは、私立大学における農学教育においても同様であると考えられる。

農業の変容を先導する農学

FAO は 2050 年までに世界の食料供給を 70%増加させることを目標としている。食糧生産が農業の主要な任務であることに変わりはない。食糧生産を支えることが農学の主要な使命であることにも変わりはないが、日本における農業の役割が農業及び森林の多面的な機能の評価について（2001 年日本学術会議）」などを通して広く理解が進んでいる。また、食料自給率の向上、温暖化、農業の六次産業化、東日本大震災への対応、食や地域の再生などの課題に見られるように、教員にとっても新たに学ぶべき課題が続出している。例えば、農業での起業や農業関係の NPO 設立を希望する学生、新規な作物を栽培しようとする農家、新しい技術を導入しようとする農家の課題に答えることができるだろうか。農業や農業の果たす役割が変容する中、その変容に追いつき、あるいは先導しうる情報、技術、見識が、農学系学部・大学院の教育や研究に強く求められている。農学系学部・大学院の教員は、生命科学、生産科学から生活科学までを結びつけ、従来の農学では問われなかった問いに答えていく使命があるといえよう。